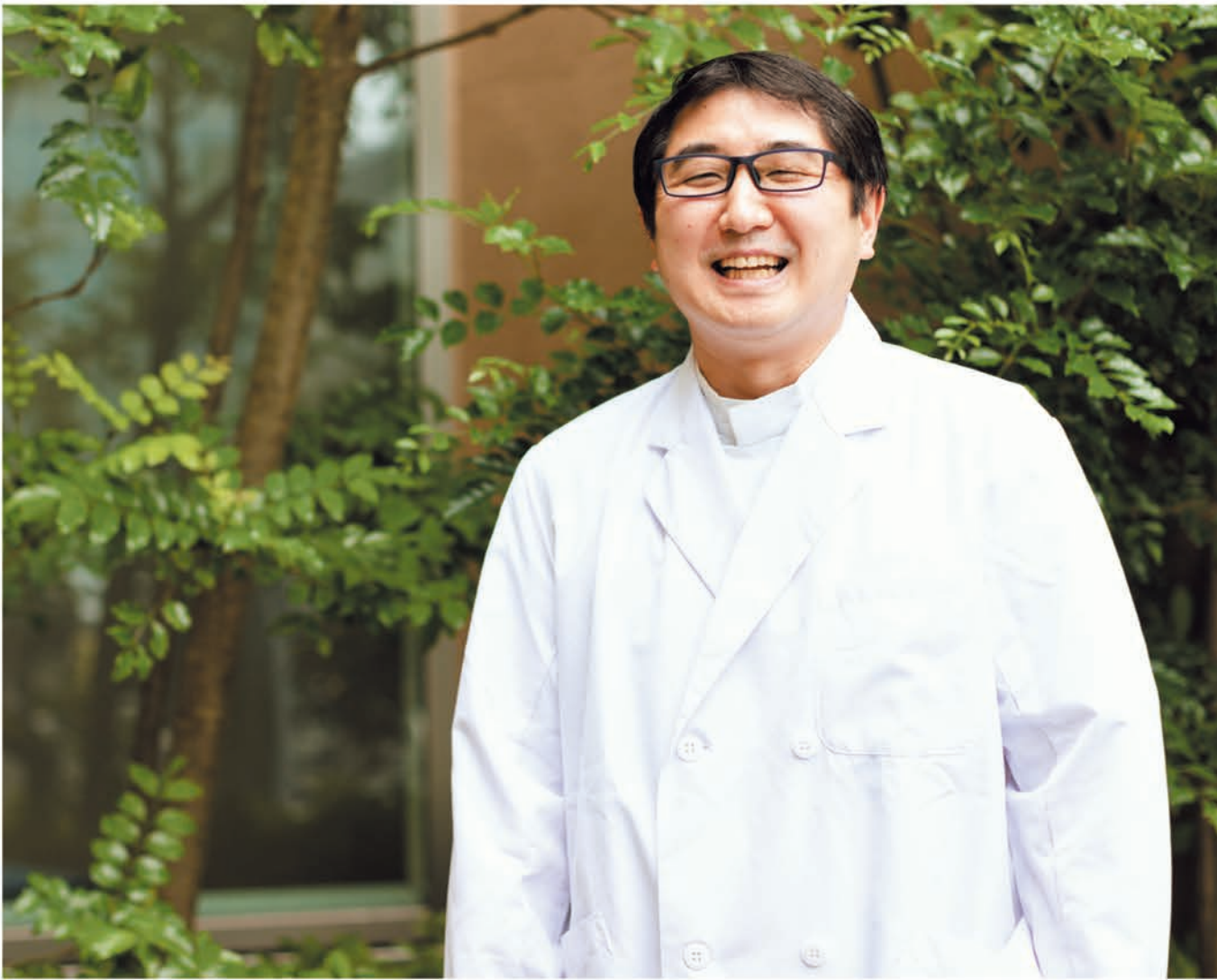


外来、入院、在宅、看取りまで 腎臓病の患者をトータルに診て その人らしい生き方を支援する



調布東山病院

[腎臓内科]

村岡 和彦氏 39歳

腎臓内科の医局に入局後、一貫して専門性を追求してきた村岡和彦氏。しかし転職後は内科での診療にも加わり、患者を総合的に診る視点が養えたと話す。「腎臓病の治療には患者さんの生活背景の理解が必要で、合併症も増えるため、全人的な診療は欠かせません」。多様な専門分野をカバーし、腎臓内科医として活躍の場を広げる村岡氏の軌跡を追った。

村岡氏のキャリアの軌跡

(埼玉県出身)

- 2005年 山形大学医学部卒業
東京大学医学部附属病院 初期研修医
- 2006年 東京厚生年金病院(現 JCHO東京新宿メディカルセンター) 内科 研修医
- 2007年 公立昭和病院 腎臓内科 後期研修医
- 2008年 東京大学医学部附属病院 腎臓内科 後期研修医
- 2009年 東京大学大学院医学系研究科入学
- 2013年 東京大学大学院医学系研究科修了
調布東山病院 腎臓内科 入職

Before 進行が緩慢な腎臓病の患者を 長く診ていきたくて腎臓内科に 全身疾患との関係にも興味

目の前で困っている人を
救いたくて医師を目指した

調布東山病院(東京都)で腎臓内科を専門とする村岡和彦氏は、地域の幅広い医療ニーズに応えるという同院の方針を体現するように、入職後は総合内科、訪問診療などに活躍の場を広げてきた。

医師を目指したのは、テレビで国境なき医師団の活動を見るなどして、困っている人を救う医師の姿に憧れたからだと言います。外来、入院、在宅、看取りと患者を最期まで診る同院での診療は、その期待に応えてくれると笑顔になる。

村岡氏は大学卒業後、東京大学医学部附属病院で初期研修を受け、2年目は都内の総合病院に移って内科の診療を経験。修了後は同大学の腎臓内科に入局した。

「腎臓内科を選んだのは、腎臓病が慢性疾患で経過も緩慢な場合が多く、腎不全の段階で亡くなるようなケースもほとんどなく、患者さんと長くおつき合いができる点

にひかれたからです。また、腎臓は心臓病や膠原病などとの関係も指摘されており、全身疾患に関係するのも興味深い点でした」

初期研修時の腎臓内科の指導医は面倒見がよく、その人柄に共感したことも入局を後押しした。

患者の生活背景の理解が
治療に欠かせないと実感

2007年の入局と同時に、村岡氏は公立病院での後期研修をスタートさせ、腎臓内科の専門知識・技能もその中で蓄積していった。人工透析も含めほとんどが初めての経験で、現場で腎臓内科のイロハから教わりながら進める状況だったと村岡氏は振り返る。

「紹介患者が大半を占める大学病院とは違い、東京郊外の公立病院では近隣の多様な患者さんを診ることにあります。なかには全身状態が良くない方もいて、腎臓病の治療に一人ひとりの生活背景を詳しく知る大切さを理解しました。

患者の言葉に耳を傾ける姿勢は、このとき養われたと思います」

2008年には後期研修の一環として、腎移植を数多く手がける大学病院で学び、さらに医局では腹膜透析を習得した。それまで人工透析を必要としていた患者が、移植後は自分で排尿できるようになった姿に感動し、条件が整えば腎移植も非常に有用な治療の選択肢だと実感したと言います。

その後、村岡氏は多発性嚢胞腎の診断・治療で有名な病院の腎センターに移り、同院で6カ月診療を継続した。

「一方で医学部時代から一度は研究に従事したいとの考えがあり、しばらくして大学院に進学しました。東京大学の医局を選んだのも『研究は最高レベルのところまで』と思っていたからです」

研究内容は腎臓病の病態モデルを作ったマウスに薬の候補物質を投与して効果を調べるなど、治療薬の開発に結びつくものだった。

診療科同士の垣根が低く
働きやすい病院に転職

「大学院では学会での発表も多く経験し、論理的な思考も磨かれました。とはいえ、いずれ臨床に戻るのが当初からの考えで、修了後

は医局を退局し、どこか市中病院に就職するつもりでした」

村岡氏の希望は地域に密着した医療を行う病院で、当直がないなど家族との時間も大切にしながら働けることも条件。大学のおかげで非常勤を務めていた調布東山病院も候補の一つとなった。

「院内は診療科同士の垣根が低く、何か気になったら気軽に尋ねられる雰囲気。居心地もよく、当時の院長から『将来はうちに来たら?』と冗談交じりに声をかけられていたので親しみもありました」

また、その頃の同院は腎臓内科の医師が少なく、自分の力が役立つだろうと感じたこと、同年代の医師が先に数名入職しており、働きやすそうに思えたことなども選ぶ要因になったと村岡氏。

「ただ、面談で『当院の内科は、各科の医師が専門を生かして診療する総合内科で、入職後は腎臓病の患者以外も入院担当として診てもらおうが大丈夫か』と聞かれたときは、少し迷いました。それでも目の前で困っている人を救いたいとの思いで医師になったのですから、総合内科にもチャレンジしてみよう」と入職を決めました」

村岡氏は2013年3月に東京大学大学院を修了し、同年4月から調布東山病院に転職した。

After 自分が求める医師像に近い 患者を最期まで診られる環境 総合的な診療もやりがいに

総合内科の知識を広げ
認定医も新たに取得

同院の腎臓内科での診療、透析室の管理などは、これまでの経験が生かせ、非常勤も務めていたの
でさほど戸惑いはなかった。また、
腎臓の機能低下を防ぐために食事
療法や生活指導などを行う保存期
指導の新規導入にあたり、看護師
との連携は以前よりさらに重要に
なったと言う村岡氏。

「塩分やタンパク質を控え、必要
なエネルギーはちゃんと摂取して
もらうなど、患者さんに具体的に
アドバイスするのは看護師さん
に担当してもらいました。私が立
てた治療方針を踏まえ、話す内容
を事前に相談して決めていくのは、
伝えるポイントの洗い出しや話し
方の工夫など、私自身にも非常に
勉強になりました」

腎臓病以外の患者の主治医とな
って治療方針を決定するのも初め
てだったが、独学で徐々に知識を
広げたことに加え、判断が難しい
救急を含む急性期医療に
加え、透析治療も充実

同院は24時間365日対応の二
次救急を含む急性期医療を提供。
院長の須永眞司氏は、退院後の患
者を寝たきりにしないで元の生活
に戻す努力が重要だと話し、入退
院支援にも力を入れている。
「そのために当院は、急性期リハ
ビリで患者さんの早期機能回復に
取り組んでいます。また在宅療養
を希望されるなら、入院中に担当
した医師が訪問診療の主治医を務
めることも可能です。同じ医師が
在宅まで一貫して診る診療体制は、
ご本人にもご家族にも安心して
いただけると思っています」

ときは、糖尿病・内分泌内科や呼
吸器内科、血液内科といった各診
療科の医師に気軽に相談できる環
境にも大いに助けられたと話す。
「当院で日本プライマリ・ケア連
合学会認定プライマリ・ケア認定
医を取得し、新たな知識を得て、
自分の活躍範囲が広がる手応えを
感じています」

さらに同院は訪問看護や訪問診
療も行っており、在宅療養を選ん
だ腹膜透析の患者もトータルにか
バーできるので勧めやすいと話す。
村岡氏自身も、腎臓病に限らず同
院入院時に担当した患者が在宅療
養に移行した際、訪問診療で主治
医として診療を続けている。
「外来で診た患者さんが入院し、
必要な治療を終えたら在宅療養、
場合によっては看取りまでと、最
初から最期まで自分が関わられるの
は魅力。私が考えていた医師の姿
にとっても近いと思っています」

現在の村岡氏は腎臓内科の外来
を週2コマ行うほか、透析室を週
2回担当し、病棟担当、関連クリ
ニックでの透析管理、訪問診療と
幅広く活躍している。
「ただ、外来透析に通われていた
患者さんも高齢になると通院が難
しくなり、長期療養型の病院に入
院されるケースがほとんど。私は
そうした患者さんがご自宅での療
養も選べるよう、適応がある方に
は腹膜透析もお勧めしています。
バッグ交換などを患者さん自身が

転職してよかったという思いは
年々強くなると語る村岡氏。
「最初は総合内科の勉強に苦労し
ましたが、腎臓以外の患者さんを
受け持つようになり、訪問診療も
含めて患者さんをトータルに診ら
れるのでやりがいがあります」
同院は一般病棟83床と小規模で、
地域のクリニックの患者で入院が
必要になった場合は、その患者を
受け入れて診療し、重症の場合は

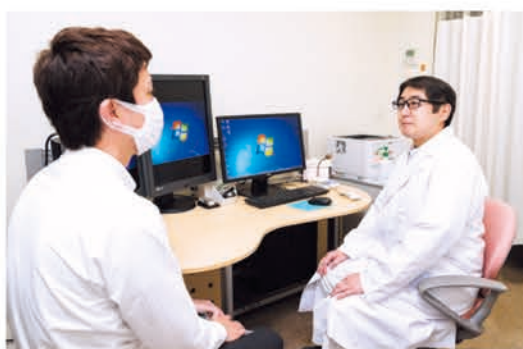
加えて内科・外科に多数の診療
科を開設し、地域のニーズに応え
る。特に内科はそうした診療科の
各医師が、専門性を生かしながら
総合内科として機能する。ドック・
健診センターで早期に見えられた
がんなどにも対処していく。
また、同院の母体となる医療法
人は2つのクリニックで外来透析
も行っている。外来透析は透析専
門の医師が担当するが、透析患者
が入院した際は必ずしも腎臓内科
医が主治医となるわけではない。
「当院の内科は複数診療科の医師
で構成され、入院透析の患者さん
もいろいろな診療科の医師が担当
します。自分の専門領域以外にも診
ること、診療科ごとの忙しさの

偏りを減らし、内科医としての素
養を高めます。村岡先生は腎臓内
科が専門ですが、総合内科医とし
ての経験を積まれているので、さ
まざまな疾患を持つ入院透析の患
者さんも安心して任せられます」
同院は小規模だけに医師同士の
コミュニケーションは活発で、
スタッフとの連携も非常に良好だ
と須永氏。そうした環境を強みと
して、地域で同院独自の急性期医

療を行っていると話す。
「急性期だけを診て、後は別の医
療機関に引き継ぐのではなく、訪
問診療・訪問看護も手がけること
で、患者さんやご家族の退院後の
生活まで支えるのが当院の方針。
医師が一人の患者さんを最期まで
診られるよう、病院として環境を
整えるのはもちろん、今後は世代
を超え、こうした方針と環境を伝
えるための準備も進めています」



調布東山病院
院長
須永 眞司氏
東京大学医学部卒業後、同大学医学部附属
病院をはじめ関連病院で診療。1997年東京
大学医学部附属病院助手。2016年から現職。



村岡氏の内科診察風景

急性期から在宅まで地域医療に貢献

Welcome

調布東山病院



同院は母体である医療法人社団 東山
会の「思いやりのあるサービス・人情味
のあるサービスを提供する」という理念の
もと、地域医療を担う「かかりつけ急性期
医療機関」として進化してきた。2011
年には新病院に全面移転し、内視鏡セ
ンター、ドック・健診センター、リハビリ室
などを設けて診療体制を充実させた。こ
のほか外来透析を行う2つの関連クリ
ニック、訪問看護ステーション、居宅介護
支援事業所も併設し、地域が求める医
療と介護支援を提供している。

施設Data
(正式名称)
▶医療法人社団 東山会
調布東山病院
(所在地)
▶東京都調布市小島町2-32-17
(開設年)
▶1982年
(診療科目)
▶内科、消化器内科、糖尿病・内分泌内科、 循環器内科、呼吸器内科、神経内科、腎 臓内科(人工透析)、外科、消化器外科、 大腸・肛門外科、整形外科、リハビリテーショ ン科、リウマチ科、皮膚科、泌尿器科、麻 酔科、放射線科
(病床数)
▶83床(一般83床)
(常勤医師数)
▶27人
(非常勤医師数)
▶112人
(外来患者数)
▶295人/日
(入院患者数)
▶78.2人/日
(2020年4月時点)